

英語の所有格の 's は clitic か？

野 田 恵 剛*

Is the English Possessive 's a Clitic?

Keigou NODA*

1. はじめに

英語の所有格（属格）の標識 's は伝統的には接辞（affix）、この場合は接尾辞（suffix）と考えられている。例えば Sweet 1952 [1891]:51 は 's のついた名詞を“genitive case”と呼んでこの形が格組織の一部であり、従って's が屈折接辞に属することを暗示している。その他には次のような呼び方がある。Kruisinga 1950 [1911]:368 “suffix”, Jespersen 1969 [1933]:138 “s-ending”, Zandvoort 1962:91 “genitive-suffix”。最近では Pence & Emery 1963:214 は“The possessive case of a singular or plural noun not ending in s is formed by adding an apostrophe and s”と言って「接辞」ないし「語尾」という用語を使っていないが、“possessive case”と言っていることから's を屈折接辞と見ていると考えられる。

これに対し、最近では's を clitic とみなすことが多い。例えば Zwicky 1977:7, Zwicky & Pullum 1983:510, Klavans 1982:19, Klavans 1985:95 など。この考えは単純な boy's や children's に対して the queen of England's hat や the woman I interviewed's argument のように's が本来直接つくべき主要語（名詞）につかず、しかも後者のような場合だと動詞についているような例（いわゆる群属格）があることに基づいている。この小論ではどちらの考えが妥当であるか考察してみたい。

2. clitic について

形態論では clitic は語と接辞の中間に位置するものとされ（cf. Bybee 1985:12）、語や接辞が重要な位置を占めるのに対しあまり重視されない。clitic は自立性がなく他の語（要素）につくが、この clitic のつく語をホストと呼ぶ。

Zwicky & Pullum 1983:510（cf. Zwicky 1977）は clitic を単純な clitic（simple clitics）と特別な clitic（special clitics）の2つに分けている。単純な clitic は文中の分布が対応の完全形と同じも

*外国語系列（Department of Foreign Languages）

ので例えば英語の's=is, 's=has, 've=haveなどの動詞、助動詞の縮約形がそうである。特別な clitic は(1)対応の完全形を欠くもの、(2)対応の完全形とは分布が異なるものの2つがある。前者はラテン語の'and'を表す-que, タガログ語の clitic な小辞などがあり、後者はロマンス語、スラヴ語の clitic な代名詞がある。

3. clitic と接辞

clitic は自立性がなく他の語に依存するという点で接辞とよく似ている。そのため両者の区別があいまいになりしばしば混同される。例えば中世ベルシア語の clitic な代名詞を Brunner 1977:97f. は pronominal suffixes と呼んでこれが clitic であることを明確にしていけない。しかしながら両者の間には本質的な違いがあると考えられその違いを単なる用語の違いとしてすますことはできない。

接辞は屈折ないし派生(語形成)の手段としておそらくほとんど世界中の言語にある。接辞は接頭辞(*un*-happy, *dis*-like), 接尾辞(friend-ly, understand-able), 接中辞(まれ)の3つが区別される。これに対し clitic は接辞ほど頻繁にあるとはいえないがそれでも広く分布している。おそらく clitic の最もよく現れるタイプは代名詞であろう。clitic も enclitic (前接辞), ¹⁾ proclitic (後接辞), endoclititic (中接辞)(cf. Zwicky 1977:7f.) の3つが区別される。ただし Klavans 1985:114f. は endoclititic の存在を疑っている。

Zwicky & Pullum 1983:503f. は clitic と屈折接辞との違いとして次の6つを指摘している。以下の説明では clitic の例として's (=is, has), 've (=have) が使われている。

(A) 「clitic はホストに関して選択の度合いが低く、接辞は語幹に関して選択の度合いが高い。」
これはつまり clitic は事実上どんな範疇の語にもつきうることである。

- a. The person I was talking to's going to be angry with me.
- b. The ball you hit's just broken my dining room window.
- c. Any answer not entirely right's going to be marked as an error.
- d. The drive home tonight's been really easy.

この例ではそれぞれ a 前置詞, b 動詞, c 形容詞, d 副詞をホストとしている。

これに対し、屈折接辞は特定の語幹につく、例えば複数接辞は名詞語幹のみに、過去接辞は動詞語幹のみに、最上級接辞は形容詞および副詞の語幹につく。

(B) 「結合上の任意のすきまは clitic のついた語より接辞のついた語に特徴的である。」

ホスト+clitic の結合では任意のすきまはない。これに対しそのような任意のすきまが時々屈

折のパラダイムでは起こる。例えば英語の動詞 stride は過去分詞を欠く。

(C) 「形態音韻論的特異性は clitic のついた語より接辞のついた語に特徴的である。」

これはすなわち's や've がついても予期せぬ音韻形が現れることはないということである。ところが屈折では形態音韻論的特異性は頻繁に起こり、不規則な語幹や接辞はめずらしくない。例えば ox/oxen, foot/feet では複数形を単数形から規則的に導き出すことはできないし, sleep/slept, think/thought, go/wentでも過去形を現在形から規則的に導くことはできない。go/went では語幹は語源的に全く無関係なものが一つのパラダイムになっている。

(D) 「意味的特異性は clitic のついた語より接辞のついた語に特徴的である。」

例えば's や've を含む語群は意味的特異性がないが、屈折では特異な意味を発達させることがある。例えば last は語源的には late の最上級で、最上級の統語論をもつが、意味領域は特異である。(last words は「最終の」(final) 言葉であって、「最もおそい」、もしくは「最近の」言葉ではない。)

(E) 「統語規則は接辞のついた語には影響を与えることができるが clitic のついた語にはできない。」

例えば、英語では's や've と結びついた語を一つの単位と見なすような統語操作は存在しない。実際これらの clitic は無限のホストと結びつきうるのでそのような操作は想像できない。しかし、屈折した名詞、動詞、形容詞は統語操作では規則的に単位として扱われる。

(F) 「clitic はすでに clitic を含んでいるものにつくことができるが接辞はできない。」

例えば英語の clitic な助動詞はすでに clitic をふくんでいるものにつくうるが、屈折接辞はできない。例：I'd've done it if you'd asked me.

さらに Klavans 1985:117 (cf. Nida 1949:97) も大変重要な点を指摘している。すなわち clitic と接辞の大きな違いは機能するレベルの違いにあるということ、すなわち、接辞が語のレベルで働くのに対し、clitic は統語論 (句) のレベルで働くということである (cliticization is actually affixation at the phrasal level)。これは例えば clitic な代名詞を考えればすぐに分かる。

フランス語

a. Je vois le garçon. 「私はその少年を見る」

b. Je le vois. 「私はかれを見る」

このフランス語の例では a で目的語である名詞 garçon が b では clitic な代名詞 le に変わってい

る。しかし a の名詞も b の代名詞も機能的には同じと考えられるので b で代名詞が clitic であるということは偶然のことさらにすぎない。さらに英語にはないが,²⁾ clitic が文の第 2 位を占めるということがよくある。これは Wackernagel の法則と呼ばれ多くの言語に見られる。この法則によると例えば clitic な代名詞は文の第 2 位に移動する。しかし移動したからといって機能が変化するわけではなく機能は本来の (clitic でない代名詞の) 位置の時に持っていたもののままである。

そうすると Zwicky & Pullum の A のホストの選択性が低く色々な語 (要素) をホストとすることができ、ホストと clitic の間に必然的な結びつきがないということも容易に理解できる。接辞の場合には屈折接辞にしる派生接辞にしる語幹はある程度個々に指定され何でもつくというわけにはいかない。例えば、派生接辞の -ness は形容詞につくがどの形容詞でも自由につくというのではないし、屈折接辞の -ed もすべての動詞につくというわけではなく決まった動詞にしかつかない。つまり、語幹と接辞の間に結合の意味的必然性があるわけである。clitic は本来自立した語として現れるべきものが自立性がないためにやむをえず他の語に依存しているのであるからホストとの間には何ら必然的な結びつきは想定されない。したがって、clitic はまさに語と接辞の中間の位置をしめ、形態論的には接辞のように、意味的には自立語のようにふるまう。そこで Klavans 1985:100 の言うように、“Semantically, clitics are more word-like than affix-like”ということになる。語は意味内容が大きい内容語と意味内容の小さい機能語に分かれるが clitic はどちらかといえば機能語に近い。またそれゆえにこそ cliticization が許されるのであろう。

4. 英語の's

それでは英語の's は接辞と見るべきか clitic と見るべきか考えてみよう。

まず's は [名詞(句)]'s+ [名詞(句)] の形になっており、's のついた名詞(句) は主語、目的語といった文構成の主要要素とは違って文全体に関係するのではなく、語レベルで他の語との関係を示す。上述のように clitic は文のレベルで働き、接辞は語のレベルで働くと考えられるのでこの's は接辞と見られる。

さらに's のついた名詞には意味的特異性がある。(例は Quirk et al. 1927:203から)

my aunt's 「おばさんの家」
 the Johnsons' 「ジョンソンさんの家」
 St Paul's (Cathedral) 「セントポール大寺院」
 St James's (Palace) 「セントジェームズ宮」
 the barber's 「散髪屋」
 the butcher's 「肉屋」
 the grocer's 「乾物屋」

the chemist's / the druggist's 「薬局」

これは Zwicky & Pullum の言う D の意味的特異性にあたる。この場合には house とか shop とかの名詞が省略されたものと考えられるがこのような省略が可能でしかも所有格だけで特定の場所を表すことができるのは's が接辞である証拠であるといえよう。clitic はホストとの結合によって特定の意味を発達させることはできない。

's を接辞ではなく clitic と見る理由の一つは the woman I interviewed's argument のように語だけではなく句にもつきうることであった。しかし類似の現象は複数の語尾 (接尾辞) -s にもあてはまる。たしかに複合語の複数では

hangers-on

editors in chief

men-of-war (<man-of-war) (Pence & Emery 1963:208)

のように主たる名詞を複数にするのが普通だが、次のような例もある。

basketfuls

fellow-travellers

forget-me-nots

Jack-in-the-pulpits

Johnny-jump-ups

touch-me-nots

go-betweens

good-for-nothings (Pence & Emery 1963:208 ; Zandvoort 1962:91)

ここでは複数接辞は's と全く平行的に複合語の末尾についてる。

5. 結論

以上見たように形態統語論的な構成法, 意味的特異性, 複数接辞とのつきかたの平行性という3つの証拠により, 's は clitic というよりも接辞の要素を多分に持っているので従来のごとく接辞と見た方がよい。

注

- 1) むしろ「前接語」, 「後接語」などと呼んだ方がいいかも知れない。

- 2) 「しかし」の意味の however がよく文中に挿入されるがこれは他の言語の第2位の clitic に近い。

参考文献

- Brunner, Christopher J. 1977. *A syntax of Western Middle Iranian*. Delmar: Caravan Books.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology. A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jespersen, Otto. 1969 [1933]. *Essentials of English grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Klavans, Judith. 1982. *Some problems in a theory of clitics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Klavans, Judith. 1985. The independence of syntax and phonology in cliticization. *Language* 61. 95-120.
- Kruisinga, E. & P. A. Erades. 1950 [1911]. *An English grammar* (7th ed.). Vol. I, second part. Accidence and syntax. Groningen: P. Noordhoff N.V.
- Nida, Eugene A. 1949. *Morphology: The descriptive analysis of words*. 2nd ed. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Pence, R. W. & D. W. Emery. 1963. *A grammar of presentday English*. New York: Macmillan.
- Quirk, R. et al. 1972. *A grammar of contemporary English*. London: Longman.
- Sweet, Henry. 1952 [1891]. *A new English grammar*. Part I. Oxford: Clarendon Press.
- Zandvoort, R. W. 1962. *A handbook of English grammar*. London: Longmans, Green & Co.
- Zwicky, Arnold M. 1977. *On clitics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Zwicky, Arnold M. 1985. Clitics and particles. *Language* 61. 283-305.
- Zwicky, Arnold M. & Geoffrey K. Pullum. 1983. Cliticization vs. inflection: English *n't*. *Language* 59. 502-513.